

FIELD NOTE

no. 78 Aug.

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 78 Aug. 2013

特集

ものが語る ものがたり

フィールド・ミュージアムのたのしみ 第21回

つるつめあわせ

おとしと餡子

新町から出て行ったもの

—銅屋鈴木家の看板—

ほたるに集まるものたち



『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

FIELD・NOTE

contents

Aug. 2013 no. 78

04

特集

ものが語る ものがたり

06 フィールド・ミュージアムのたのしみ第21回
カヤネズミの楽園をつくる (2)
-カヤネズミの巣はなぜ美しいのだろう-
物言わぬ彼らの言葉

10 つるつめあわせ

18 おとしと餡子

22 新町から出て行ったもの
-銅屋鈴木家の看板-

24 ほたるに集まるものたち

28 おわりに

30 フィールド暦
センサーカメラが写した動物たち

32 つるりん 夏

34 コラム 駅舎のツバメの巣
野外へ誘う一冊

36 富士道を歩く 2013 ②

38 起き上がる朝 第8回
-生徒と本気で向き合う-

42 FIELD・NOTE NEWS

46 編集後記



表紙と裏表紙の写真は昨年8月に遠藤静江さん宅でアイの生染めをしてつくった正絹の手ぬぐいです。アイを摘み、水を加えてミキサーにかけた汁に手ぬぐいを浸しました。模様は手ぬぐいを結ったまま浸すことでできました。アイや水の量が違うと色も変わります。今年もアイの生染めに挑戦しようと思います。
(前澤志依)

ものが語る ものがたり

ひとつのものに、目がとまる。

はじめて目にした

なぜか気になる

使い込まれた

きれいな、あるいは不思議な

どうしてそこにあるのかわからない

もの



それらと出会ったとき、

私たちは足を止め、じっくり眺める。

自分自身で調べたり、考えたりする。

その“もの”に関わるひとの声に耳を傾ける。

そうして集めた断片を繋ぎ合わせたとき、

“もの”からひとつの“ものがたり”が見えてきた。

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

カヤネズミの楽園をつくる (2)

—カヤネズミの巣はなぜ美しいのだろう—



今年の都留の梅雨明けは7月6日でした。梅雨の期間は1ヶ月ほど。例年になく早い梅雨明けです。

7月6日、オオムラサキが中屋敷フィールドの小屋の底で羽化しました。色彩が鮮やかなオスです。フィールドに向かう途中にある柄杓流川の橋の付近には、今年はバイカモが白く小さな花を咲かせています。

身近なカヤネズミ

カヤネズミの庭では、オギが勢いよく生長しています。5月23日には1mにも満たなかった丈が、7月6日には2mを超えました。

カヤネズミの巣は今のところできていません。はつきりとした理由はわかりませんが、まだ巣をつくる気分にならないのでしょうか。

カヤネズミは全国的に数を減らしているようです。隣の神奈川県では減少種に指定されています。住み場所となる草原の減少もその一因ではないでしょうか。しかしかつては私たちの身近な存在だったようです。フィールドへの入り口で稲作をしている清水貞一さん(90)は、毎年秋になるとイネにつくら

た巣の場所を教えてくださいましたし、中屋敷フィールドの地主の渡邊宗男さん(85)からは、クモの巣にかかったカヤネズミをみた経験を伺ったことがあります。お二人とも、そのネズミの体が小さいこと、赤みがかった毛をしていることを話してくださいました。カヤネズミに間違いありません。

中屋敷フィールドでは今のところ巣はみつかりませんが、ほかの場所ではどうなのでしょう。ソフトボールほどの大きさの球状の巣があれば、カヤネズミが生息する目印となります。7月14日、さつそく近くの十日市場で探してみることにしました。

さまざまな素材を用いた巣

十日市場にはススキやオギ、ヨシなどイネ科植物の群落が点在しています。農道を歩いてみると、ススキの群落に巣をみつけました。ただし巣に近づきすぎるとカヤネズミが子育てを放棄してしまうかもしれません。5mほど離れて双眼鏡で観察することにしました。高さ約1mの位置にあるこの巣は、直径が10cmほど。ススキの葉を幅5mmほどに裂き、編



スギナを使ってできた巣。地面に接するようにできていた(2013年7月14日)



スゲの仲間につくられた巣は、なかなかみつかりにくい(2013年7月14日)



ススキの葉を使いハンモックのように吊り下がる巣(2013年7月14日)

み込んでつくっています。葉脈に沿って裂いているため、巣は緑色を保っていました。数本のススキの茎を支柱にしているため、風が吹いても落下する恐れはなさそうです。

スゲの仲間につくった巣は、もともと葉の幅が5mmほどなので裂くことはせず、細い葉をそのまま編み込み巣をつくつてあります。密生したスゲの葉に覆われていて、ていねいに探さないとなかなかみつけることはできません。いつでも逃げ出せるためでしょうか、巣の出入り口は2箇所あります。

意外な植物を用いた巣もありました。スギナを使った巣です。密生したスギナの葉をたぐり寄せ地面に接するようにできていました。カヤネズミの巣材はイネ科の植物が中心だと思ひ込んでいたため、スギナを使った巣をみたのは初めてのことです。

どの巣も葉を裂いたり、そのまま編み込んだりするなど、葉の形や性質にあわせて柔軟に対応してつくられています。しかしどの巣も球状で、いくつかの茎を支柱として使い、風が吹いても簡単には落下しない仕組みになっています。

巣のなかはどうなっているのでしょうか。ス

スキの葉を使った古巣を調べてみることにしました。巣の断面を見ると二重構造になっています。子育てをする場所にはススキの穂を、外側には細かくススキの葉を裂いたものを使っています。これだと雨に濡れてもすぐに乾き、風通しもよく、内部は保温が利きそうです。

巣が美しい理由

カヤネズミの巣をみつけるたびに、私はこの巣の形も構造も簡素で美しいと感じてきました。余計な作為のあとはみえず、ただ子どもを育てるためだけに機能的につくられているからです。

無心でつくられた簡素で生活に即した物は美しい、と民藝運動の創始者である柳宗悦^{やなぎむねよし}氏(1889~1961)は民衆の日常使いの品を高く評価しました。カヤネズミのこの球状の巣をいつみても美しいと私が感じるのも、これと同じ理由によるからではないかと思うのです。

北垣憲仁(本誌発行人) 文・写真

物言わぬ 彼らの言葉

標本には多くの情報が詰まっています。
いかにして、それらに気づけばいいので
しょうか。過去に作られた標本が、現在
に語りかけるものとは何でしょうか。



大学から見える三ツ峠山

「1958年2月10日 三ツ峠」

本学の標本室で見つけたホシガラスの剥製のラベルには、このような記載がありました。三ツ峠山は都留市の西端にある山で、大学からよく見えます。三ツ峠山では1970年代までホシガラスの記録があるものの、現在は生息していません。何らかの理由により、三ツ峠山には住めなくなったのでしょうか。ホシガラスの生活史を知っている人なら、まだ寒さの残る3月には抱卵に入り、子育てのときは秋に貯えた木の実をヒナに与えていたに違いないと考えます。3月といえば里ではウメの花が咲いてフキノトウが顔を出すころ。そんな時期にあの寒い山の上ではホシガラスが子育てをしていたのかと想像するわけです。

ホシガラスに関心のある僕にとつて、この剥製はとても重要です。なぜなら、三ツ峠山にホシガラスがいたことを示す確かな証拠になるからです。富士山では年間を通してホシガラスが生息しています。もういなくなってしまう三ツ峠山と、いまでも生息している富士山の違いを調べてみたら、ホシガラスの好む環境を知ることができるかもしれない。そ

んなことを思い起こさせる剥製です。

いまから約30年前の楽山（大学周辺）で採集されたミヤマセセリの標本もありました。採集地の植生の記録は残っていませんが、ミヤマセセリがいたことを考えると、コナラやクヌギが生えている明るい林だったのでしょうか。早春に出現するこのチョウは、いまでも大学の周辺で見られます。つまり、ミヤマセセリから見た環境は、約30年前とそれほど変わっていないのかもしれませんが、この標本は、当時の植生を知る手がかりにもなります。



ミヤマセセリの標本（中央）

標本が持つ情報

生きものの標本は、採集地や採集年月日などの情報が書かれているラベルがついていないと価値がありません。標本とラベルがセットで、初めて価値のある標本になります。

標本ラベルには、標本からは知り得ない採集地や採集年月日などが記載されています。いっぽう、標本が持つている情報はとても膨大で、小さなラベルには書ききれません。また、「そのとき」は見えない（気づけない）情報も多く秘めています。そのものから何を引き出すかは、観察者にゆだねられているのです。たとえば、ツツドリの尾羽の枚数。ある羽図鑑を見ていたら、ツツドリの尾羽は12枚あることになっていました。いくつかの仮剥製標本で確認すると、すべて10枚でした。それから、ヒヨドリの初列風切羽しよれつかざりばね（翼の一部）が11枚あるとされている羽図鑑や、アオバトの尾羽が12枚となっているものもあります。これらも標本で確認すると、すべて10枚と14枚でした。図鑑の表記が間違っているとは一概には言えませんが、少なくとも自分の目で

確かめた範囲ではこのような結果でした。鳥の標本を作るさいに何箇所かの部位は測定するものの、通常は羽の枚数までは記録しません。標本になってからでも観察できる部分は、後から見ればいいからです。

わざわざ時間をかけて標本を作らなくても、もつと手軽に記録を残す方法はないのかという意見もあるでしょう。近年の光学機器は安価で、色彩も鮮明に残せます。デジタルデータとして保管すれば、収納場所も必要あ



ツツドリの仮剥製標本

りません。しかし、写真では被写体を立体的に理解するのは難しいですし、撮影したものから正確な大きさを計ることはできません。スケッチはものを観察する優れた方法ですが、観察者が見たこと（気づいたこと）しか残せません。ある模様や突起がもともとないのか、それとも描かれていないだけなのかを第三者が判断するのは困難です。人の記憶はいずれ失われていく性質のもので、時を経て変化する場合もあります。しかし、標本として実物があればいつでも細部まで観察することができます。作製に時間がかかっても、管理が大変でも、標本を残すことには大きな意味があるとわかります。

保管された標本から、どのような価値を引き出すことができるのでしょうか。物言わぬ彼らの言葉に気づくのは、何か疑問を持ったときがほとんどです。繰り返し観察して、そのたびに学びがあるのは実物だからで、人が作ったレプリカが相手では、このような仕事は決してできません。標本に向き合うと、そのものが持つさまざまなスケールの情報の多さに魅せられます。

西教生（本学非常勤講師） 〓 文・写真

つるつめあわせ

はじめての都留で

はじめて見たもの

はじめて聞いたもの

いろんな「もの」がたり」をみつけました

11 観察から感じる

12 クワの実が紡ぎ出す色

13 ふたつの本物に近づく

14 神輿を通した繋がり

15 地域を守るヒイチ

16 服屋さんのソファアーのはなし

17 瞬間を見逃さない





観察から感じる

葉

の中央に花や実をつける樹木、ハナйкаダ。昨年、葉

の上に小さな黒い実をつけているハナйкаダを授業で見て、「この実のつきかたは何だろう？」と興味をもった。そこで今年の5月8日から本学附属図書館横のビオトープに毎週通い、ハナйкаダの観察をすることにした。

5月8日、ハナйкаダは小さな花を咲かせていた。ある図鑑には一枚の葉に一つの花をつけるのが一般的だとあったが、私が観察したハナйкаダは一枚の葉に複数の花がまと

まっていたものが多かった。

それから2週間後の5月22日にハナйкаダに変化が現れ始めた。花が咲いているものはまだ多いが、花の下が膨らみ、実がなりつつあるものを見つけた。実の発見を嬉しく思い、葉をめくってみたり、ハナйкаダの周りをまわってみたり、ほかの葉にも実がないかと探す。そんなことをしていたら、ふと、すべての花が実になっていくわけではないことに気がついた。すべての花が実になるのを楽しみに観察に通っていたが、その後もそれらに実がなることはなかった。受粉しなかったからかなと残念に思う。

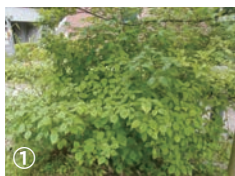
6月も中旬に入り、今度はできた実が黒く熟すのはいつかと、観察を続ける。すると、6月21日に実のついている葉が減ったように感じた。よく見ると、葉の中央には花や実がついていた痕跡が黒い点で残っている。減っていたのは気のせいではなかったのだ。梅雨の時期に入ってい

たから、風や雨で実がとれてしまったのかもしれない。もしそうなら、梅雨明けころには全部の実がなくなるのではないかと心配になった。

梅雨が明け、7月11日の観察で黒い実を見つけた。熟して黒くなつた実は探しやすい、想像以上に実が見つかり、すべての実がとれていなかったことにほっとした。

振り返ると、毎週観察へ行くのは手間がかかったり、天候が悪かったり、大変なことも多い。だけど、今では先週とは違ったところを探すことの楽しさが、大変という気持ちを上回っている。図鑑を見ただけではわからない生長の過程が、今回の観察を通して見えてきた。先週より実が大きくなつたとか、色が微妙に変わつたとか、毎週観察したからこそわかる違いは多い。今週はどこが違うだろうと考えながら何度も足を運ぶことが、私にとつての観察することであり、楽しみでもある。

廣瀬はづ紀(社会学科2年) 文・写真



①ハナйкаダの木 (2013.7.27) ②ハナйкаダの雌花 (2013.5.22)
③ハナйкаダの実 (2013.5.29) ④黒く熟した実 (2013.7.14)

葉の主脈の中央付近に、淡緑色の花をつけるのが特徴的。
その見た目からハナйкаダと名がつけられた。



クワの実。黒く熟したものを採る。合計 400g の収穫があった (2013.6.6)



クワの実が 紡ぎ出す色

都

留に引越してきて、散歩中に見かけた真つ黒いクワの実。「クワ」というと、小学生のころ、

背伸びしながら採って食べたことを思い出す。こんなにたくさんの実がなっているのならば、ジャムにすることだつてできるかもしれない。今は身長が伸びて、高いところの実にも手が届くようになったのだから、小学生のときよりもたくさんの実が採れるはずだ。そう思つて、クワの実を採りに行くことにした。

富士急行線 禾生駅を過ぎたあたり、国道139号線沿いの2本のクワの木から、いちごバックにこんもり盛れるくらいの実を収穫した。生のままの実を食べてみると、甘酸っぱいものもあれば、少し渋味の残るものもあった。帰宅後、ジャムにしようと砂糖を加えて火にかける。白い鍋と、ジャムをかき混ぜるゴムベラを鮮やかな紫色にそめて、甘い匂いのする赤紫色のジャムは完成した。できたての熱いジャムをひとさ



できあがったクワの実ジャム (2013.6.6)

じ舐めてみる。ふわりと甘酸っぱい味が広がった。

後日、クワの実ジャムを使つてムースを作った。ムースの生地なのにジャムを混ぜ込んでみよう、と思いついたからだ。冷やし固めるため、容器に流し込んだ薄紫色の生地を冷蔵庫に入れる。およそ2時間後、そろそろ固まったかなと冷蔵庫を開けて驚いた。ムースは、パステルブルーの色に仕上がっていたのだ。その色にびっくりしながらも、どんな味になったのだらうかと恐るおそる味見してみる。ひんやりとして甘い。口の中にかすかな酸っぱさが残った。ジャムのときとは色がずいぶん変わってしまったけれど、やはりク

ワの実の甘酸っぱい味がする。

真つ黒な実が赤紫色のジャムに。赤紫色のジャムがパステルブルーのムースに。甘酸っぱい味は残したまま、クワの実はその色をくるくると変えていく。手を加えていくたび、クワの実は新しい色を紡いでいった。ほかのカタチになれば、クワの実はもつと違う色も紡ぐのだろう。今回、クワの実が紡ぎ出す新しい色をじつさいに見ることが楽しかった。もつと新しい色の変化も見たい、自分が新しい色の紡ぎ手になれるかな、と思うのだ。



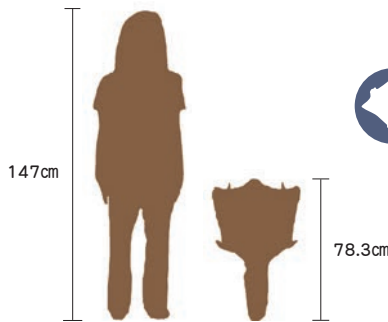
クワの実ジャムを使ったムース (2013.7.29)

森本楓 (社会学科1年) || 文・写真
金原由佳 (社会学科1年) || 写真



ムササビ (♂)
2003年10月31日 石船神社
体重 1000g 全長 74.1cm (毛もいれて 78.3cm)
頭胴長 35.5cm 前足 6.5(爪含 7.0)cm
後足 6.5(爪含 7.0)cm 耳 3.5(毛含 5.0)cm
胃の内容物: 葉っぱ - 作成、計測: 小口

(上) ムササビの標本
(下) 標本ラベル一部抜粋



ふたつの本物 に近づく

ムササビの標本と私を
比較してみた

私

が初めて出会ったムササビは本学自然科学棟にある標本だった。リスやモモンガに比べれば大きいことは知っていたがじつさに見るとその座布団ぐらいある大きさに、驚きを隠せなかった。私は

標本となったムササビに興味があり、製作者である小口尚良さん^{おぐらひさよし}にお話を伺うことにした。

小口さんによると、標本になったムササビは都留市朝日馬場の、石船神社境内のシラカシの木に設置されている餌台のそばで死んでいたという。それを近くの旭小学校の職員が発見し、当時旭小学校に勤務していた小口さんが標本にしたのだそう。



石船神社に住むムササビのために設置された餌台。周辺の地面には食痕のあるドングリが落ちていた

死体が入ることはまれで、本にしておけば長年に渡って活用できる。ムササビの一番の特徴である飛膜を広げた姿の標本は当時本学になかったため、子どもたちに本物を見たり、触ったりしてもらおうと、いいねいに2時間ほどかけて製作したとおっしゃっていた。私も標本に触れてみたがムササビはとても愛くるしい顔つきをしていて、想像以上にふわふわとしている。この発見は間近で見られる標本だからこそわかったことだ。

標本を見ているとムササビが本当にこんな姿で滑空していくのか自分の目で確かめたいくなる。私はムササビを見ることができる東桂の今宮神社を訪れた。静かな林でじつと、ム

ササビを待つ。木々の揺れる音のなか、一点を見続けていると時間とまっとうしているような不思議な感覚がした。ずっと見上げ続けるのは首が痛かったけれど、滑空するムササビの姿をどうしても見たくて見上げるのをやめなかった。そのとき、御神木からてつぺんのほうにささつと登っていったムササビが木々の間を滑るように飛んでいった。ほんの一瞬のできごとだったが確かに標本と同じ姿で滑空していた。

入学前からずっと会ってみたいだったムササビ。今回、標本と生きている姿の両方を通して、ぐつとムササビとの距離が縮まった気がした。



左が周囲を林に囲まれている石船神社。右の奥に見える白い建物が旭小学校

加藤萌香(初等教育学科1年) 文・写真



神輿を通した繋がり

都

留市上谷の金山神社には市の指定文化財にされている

神輿がある。慶応2年（1866年）

に製作され、四隅には狛犬、正面に

鶴、中欄に虎、扉の両側に孔雀、下

欄に亀が彫刻されている。この神輿

は毎年8月7日前後におこなわれている

例祭で「どっこいどっこい」の

合いの手とともに地域の男性たちによつて担がれ、町を巡る。

そんな神輿に興味をもった私は、

金山神社の神主さんである、金子

寿元さん（54）にお話を伺った。寿元さんと奥さんの富士子さん（54）は私の質問に対し、ていねいに答えてくださった。

神輿について「金山神社の神輿にはどんな役割があるんですか」と伺ったところ、寿元さんは身ぶり手ぶりを加えて、「例えるなら、ろう

そくの火。大きなろうそくが神様。神輿に、その大きな火から小さなろうそくの火を分けていただく。小さなろうそくの火を乗せ、自分の地域

を巡り、町の安全を守る。神様のほうからきてくださるので、神様のところへ行けない人は巡ってこられた神輿に拝む」と答えてくださった。

神輿は、町を巡ることで、神様のもとへ行けない人も、ほかのみんなと同じようにお祈りができるようにするという役割をもっているのだ。

全く予想もしていなかった神輿の役割は、寿元さんがしてくださったお話のなかで、いちばん印象的だった。神様にお祈りしたい人がみんなと

一緒にお祈りできるよう、担ぎ手が夏の暑いなか、重たい神輿を担いで運ぶ。それを待つ人々は、運んでくれた担ぎ手たちに感謝をする。私は、寿元さんがおっしゃった神輿の役割から、この繋がりを連想した。神輿は神様のほかにも人々の思いを乗せて町を巡っている。

今年の8月4日の例祭で神輿が町を巡っているのをはじめて見た。神輿の役割を知らない今までの私だっ

たら、神輿が町を巡るのを見て「楽しい」と思っても「ありがとう」と思うことはなかっただろう。しかし、金山神社の神輿の役割を知ることができた私は、担ぎ手たちに「ありがとう」と思うことができた。そこにきつと、担ぎ手と私の繋がりもできただけだ。

参考文献

『都留市社記』
都留市教育委員会、1979年

川田陽香（社会学科1年） Ⅱ文



2004年の例祭 祝詞が終わり、待機中の神輿
(高尾芳久氏＝写真提供)



十日市場の梵天棹。写真は十日市場在住の斎藤さんからいただいた



地域を守るヒイチ

「二」角形の座布団にも似た布飾り、ヒイチ。都留市十日市場では多くの家の玄関に飾られている。はじめて見たときは、それが何なのか見当もつかなかった。そばを通りかかった地元のかたに「これは何ですか」と尋ね、魔除けや縁起ものとして玄関に吊り下げていることを教えていただいた。

ヒイチのことが気になった私は、ヒイチについて詳しいかたを探してみることにした。何人かの地元のか

たからお話を聞いてわかったのは、ヒイチが道祖神祭りのご神木である梵天棹^{ぼんてんさお}に取り付けられる飾りだということ。この祭りは毎年旧暦の正月におこなわれるそう。ヒイチは祭りが終わると、欲しいというお宅に配られる。

以前は道祖神祭りをおこなっていた地域はほかにあったが、最近ではかなり減ってしまったらしい。なぜ十日市場には、今でもこの風習が残っているのだろう。そんな疑問が私のなかに生まれた。答えを知りたかったけれど、それ以上詳しい話を知っているというかたはなかなか見つからない。その後も何度か十日市場を訪れ、そこで知り合ったかたに「お年寄りもたくさん来るから、何か話が聞けるかもしれないよ」と自治会の集まりに誘っていただいた。

6月25日の集まりで、私はあるおばあさんに出会った。そのかたはヒイチについて調べたことがあるそうで、こんなお話を聞かせていただいた。

た。その昔、十日市場では疫病が流行っていた。詳しい人数はわからないが、多くの人がその疫病で命を落としたりしたらしい。そこで地域を守るため、魔除けのヒイチが付いたご神木を立てた。それが十日市場の道祖神祭りの始まりだったそう。

しかし、道祖神祭りやヒイチを飾る風習が始まったのは、もうずいぶん昔のことだ。なぜ道祖神祭りをおこなうのか、どうしてヒイチを飾っているのかを知っている人は、今ではとても少なくなった。「それでもこの風習はなくならないですね」。私がそう言うと「魔除けとか、そういうものはなくならないのよね。もし止めてしまつて、何か災いが起きたりしたらやっぱり嫌だから」。そんな言葉が返ってきた。人々が平穏を願う気持ちは、昔も今も変わらない。十日市場で暮らす人々を見えない災いから守り続けている、そんなヒイチの物語が私には見えたのだ。

舟田早帆（社会学科1年） 〓文



服屋さんのソファーのはなし



店内は季節に合わせこまめに模様替えされる



ソファーはレジに立つ香織さんと話しやすい位置にある



赤いひさは「JEANS SHOP NEW YORK」の目印

富

士急行線 都留市駅から歩いて3分ほどのところに、赤

いひさが目印の「JEANS SHOP NEW YORK」がある。女性向けの服や小物が並ぶ店内は明るく、壁や床、服を置く棚も、木製のもので統一されている。服は店主の上原香織さん(42)自身が、かわいい、着てみたいと思ったものを買い付けているそうだ。

そんなお店のなかで、ひときわ印象的なのが、レジカウンターの向かいに置かれた大きなソファだ。大人2人がゆとりをもって座れるくらいのソファが、でんと置いてある。座ってみると、ふかふかしていても座り心地がいい。

でも、服屋としたら、ソファを置くよりも、もっと服を置くほうがいいのでは。そんな疑問を持った私は、どうしてお店に大きなソファを置いているのか尋ねてみた。すると、香織さんは楽しそうに「インショップ(※)のような、お客さん

がただ流れるように買い物をするだけのところじゃなくて、お客さんが

ゆつくりお喋りをしたり、くつろいでもらったりできるお店にしたいから」と語ってくださった。その言葉通り、お喋りを楽しむためにお店を訪れる人は少なくないようで、私がうかがったさいも、ソファに座ってお喋りするお客さんを見かけた。「路面店って、お店のドアを開けるのに勇気がいるでしょ？でも、気負わずに、ちよつとお喋りに来るくらい気持ちで来てほしい」と香織さんは語る。ソファは香織さんの「お客さんとの繋がりを大事にした」という気持ちを表すものだったのだ。

ちよつとお喋りに、の感覚で服屋に行く。それは大型量販店でしか服を買ったことのなかった私にとつて、とても新鮮な感覚だった。

※大型店のなかにある独立した小型店のこと。ショップ・イン・ショップの略

金原由佳(社会学科1年) 文・写真



『雪やんで』 2010年 アクリル 160 × 120cm
(藤江啓一氏＝写真提供)



瞬間を見逃さない

都

留にはどんな絵を描く人がいるのだろう。そんな疑問をもった私は、上谷にある喫茶店、ギャラリー喫茶英^{はなみち}を訪れた。そこで紹介していただいたのが藤江啓一^{ふじえけいち}さん(65)。東桂のご自宅をアトリエとし、趣味でアクリル画を描いているからだ。

どんな絵が見られるのだろうとわくわくする気持ちのなか、私が見せてもらったものは一枚の雪景色の絵

だった。その絵は、じつさいに東桂に存在する山のなからしい。幻想的な雰囲気があり、絵に引き込まれるようだ。私はアクリル画と聞いて、薄い色が重なった淡い色合いの、水彩画のようなものを想像していた。しかし、藤江さんが描くアクリル画は水彩画のような繊細さを持ちながらも、油絵のような力強さがあつた。細部の色は線一本一本が鮮明でそれが全体を引き締め、絵の木々をいきいきとさせているように見える。

藤江さんの絵を見せていただいたとき、自然と出た言葉が「きれい」だった。絵の筆使いや色合いなどといった絵画としての美しさはもちろんだが、描かれている景色そのものにも美しさを感じた。このような景色は、描きたいものをあらかじめ決め、意識的に探さなければ出会えないものだろうと思っていた。けれども、藤江さんは絵のきつかけとなる景色は偶然見つけたとおっしゃった。なぜこんな景色が、偶然に見つ

けられるのか。そんな疑問をもったとき、絵のこだわりをうかがったところ「美しさ」という答えが返ってきた。さらに、「瞬間瞬間にいつぱいあるよね」とおっしゃった。この言葉が私の心を動かす。私はこんな景色は藤江さんの前にだけ現れており、藤江さんはそういうものと出会う機会にめぐまれていた人なのだと思うっていた。しかしそれは違う。藤江さんは日常にあふれるものに目を向けており、藤江さんも私もきれいなものを見る機会は同じくらいあつたのだ。

私はありがちな美しいものにばかり「きれい」を感じていたが、少し見かたを変えるだけで「きれい」は日常の一瞬にも見つけられることを知った。これは日常の一瞬を見逃さない藤江さんだからこそ見つけられた景色なのだ。私にとってこの絵は、なんでもない日常の見方を変える、そんなきつかけとなる一枚だった。

伊藤瑠依(社会学科1年) 〓文



おとしと 餡子

私が都留ではじめて出会った和菓子は、すがや製菓店さんのかりんとう饅頭。かりんとう皮の食感と、後を引かないすっきりとした餡子の甘さ。おいしいなあ、もういっこ食べたいな、とうれしくなった。

すがやさんのいちばんのこだわりは手作りの餡子だ。そんな特製の餡子ができる過程で、使われ続けている道具の存在があった。

深澤加奈（国文学科3年）＝文・写真

富士急行線 都留市駅のほど近く、国道139号線沿いにすがや製菓店はある。6月26日の午後、お店に足を運んだ私を出迎えてくださったのは、5代目店主の菅谷賢一郎さん(44)。私の言葉に、うんうん、と明るく頷いてくださる。「職人さん」という響きから眼光の鋭い人を想像していたけれど、私の勝手な思い込みだったようだ。

まあまあ、とにかく工場(こうば)へどうぞ、と奥に案内される。暖簾(のれん)をくぐり抜けた先には、売り場よりも広い空間が広がっていて驚いた。正面にはステンレス製の大きな作業台が縦に二つ並び、右手と正面奥には引き戸で仕切ら



ショーケースには八端最中や、かりんとう饅頭が並ぶ。店内にはお客さんが腰掛けられる椅子もあり、暖簾の奥は工場になっている

れた小さめの部屋がある。左手の部屋には、何やら機械類が置かれているようだ。お店のかたがたがすれ違いざまにあいさつしてくださる。現在お店は、ご家族のかた5人とパートのかた4人で切り盛りなさっているそう。作業台のまえに立ち、竹べらで最中(もなか)に餡子(あんこ)を手ぎわよく詰めているのは、奥さんの晶子(あきこ)さん(43)。私に気がつく顔を上げ「いらつしやい」と笑顔で声を掛けてくださった。

賢一郎さんは、砂糖入れに使っている屋号が書かれた木箱(ようかん)や羊羹包丁(ちくかん)、落雁(らくがん)の型や木べらなど、いろいろな道具を出してきては私に見せてくれる。そのあいだにも、暖簾の向こうの店内には、入れかわり立ちかわりお客さんが訪れているようだ。お店のかたがたのあいだでは「最中あと10個詰めて」などと声が飛び交う。賢一郎さんも餡子の仕込みの続きをするということで、その作業を見せていただくことにした。

すがやの餡子

すがやさんでは小豆の皮を取り除くことで、えぐみのない餡子を作るそうだ。まず大



最中に餡子を詰める晶子さん(右)と賢一郎さん(左)

きな鉄鍋で小豆を煮て、瞬間的に皮をぱっと膨らませる。それを足で踏み、ざるに揚げて水で流すと大まかに皮が剥ける。それをもう一度煮てざるに揚げると、二度目の皮剥きの完了だという。ここまでの作業は私が来るまえに終わっていたので、その続きの作業である皮剥きの仕上げから見せていただいた。木製の桶に布袋を取り付け、すがやさんのなかでは「おとし」と呼んでいるふるいに小豆を流し込み、手でこしていく。すると皮だけがおとしに残り、袋のなかに小豆の中身が集まるようになっていく。

るようになっていく。

今まで見せてくださった道具のなかで、賢一郎さんにとっていちばん大切なものと言う「おとし」。賢一郎さんはそのおとしに手を入れ、手首をぐつ、ぐつと動かす。ときおり水を足して、なかの小豆をぐるりとかき混ぜ、また網目に手のひらを押し付けるようにして小豆をこしていく。一見単純そうな作業だが、じつは違う。おとしを扱うには、そのための力加減を知る必要があるのだ。網目が馬の毛でできているおとしは、力を入れすぎればすぐに破けてしまう。「昔はさ、子どものころはやらしてもらえなかったんですよ。『壊しちゃうからだめ』とかってね。ぐいぐい、こんなんしたらさ、『力入れすぎ』って」と、力を込めてこすふりをしたあとで笑い、どこか懐かしそうな表情の賢一郎さん。お父さんから言われたんですか、と訊くと「いや、あのね、おばあちゃん。子どものころいつもこうやって祖母がこしてたから」。

すがやのおとし

すがやさんには常に2、3個のおとしがあ



最後の皮剥き。おとしに小豆を入れ、手でいいいにこしていく

る。ひとつきりだと、壊れてしまったとき、餡子の仕込みができなくなってしまうからだ。おとしの職人さんは「御用聞き」で、春になると身延町のほうからやってきたのだそう。網目がだめになったものは職人さんに預けて張り替えてもらい、本体そのものが使えなくなると、新しいおとしを作ってもらう約束をしたそうだ。数年前にその職人さんが亡くなってからは、人づてにほかの職人さんを紹介してもらったという。

おとしを手にとつて見せていただく。丸い木枠を繋ぎ止めているのは樹皮。いまではお

としの職人さんも釘を使うことが多くなつてしまったけれど、網目の張り替えのためにおとしを預けると、これは変わらず繋ぎ目を樹皮で編んでくれるそうだ。どんな技を使えば、こんなふうになつちりと編み込めるのだろうか。よく見れば、馬の毛でできた網目は一つひとつ微妙に大きさが異なっているのが分かる。この大きさの違いが、機械では出せない、自然な舌触りの餡子にしてくれるそうだ。

皮が取り除かれた小豆は水分を絞り出されたあと、工場に入ったときに気になった左手の部屋の、大きな銅鍋に砂糖とともに入れられる。ここで熱しながらかき混ぜられて、餡子になつていく。気温や湿度の関係から季節によつて変わってくるが、完成まで約1時間から1時間半はかかるそうだ。できあがりは木べらにすくつたときの、餡子の落ち具合で見極めるといふ。こうして、仕込みからできあがりまでおよそ6時間を費やす。

小豆の味

「すんごい熱いから気を付けて」と、木べらに付いた餡子を差し出される。少しだけ指

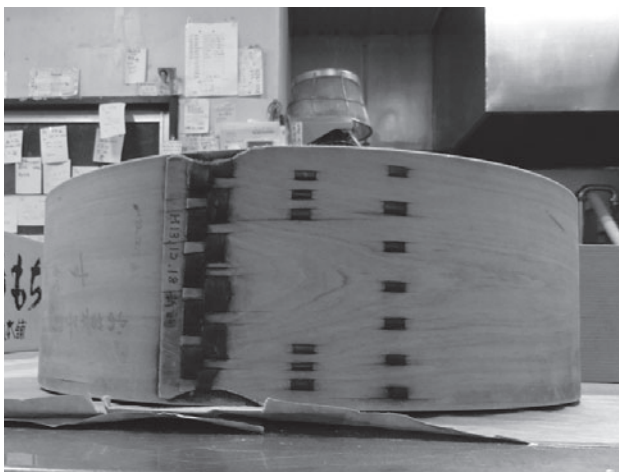
に付けて味見させていただくと「まだ甘みが薄いでしょ」と賢一郎さん。じゅうぶん甘いな、といまいちぴんと来ていない私を見てか「あ、熱いから甘味感じるか。じゃあ」と今度はできあがっている餡子が差し出された。食べてみると、確かにこちらのほうが甘さがぎゅつと詰まって風味も濃い感じがする。そう伝えると「でも嫌な甘さじゃないでしょ。なんか、最後まで別に甘さは残らないでしょ。最後、なんだろこの味、つてのは小豆の味なんですよ」。そう言った賢一郎さんは得意げだ。

「いつときね、みんな新しいものへ流れるけど、やっぱ最後はこう、昔の味かなって。一回は離れていくけど。で、そのお菓子にどんだけ自分の味を作れるかどうかってことだよな」。力を込めて餡子をかき混ぜつつ、賢一郎さんはいう。「こつてこての和菓子屋さんだからさ、うちは。うちはこの餡子つうものがあつて、これからこう枝を作っていくかなきゃならない。これが代々繋がってきたもの。これはもう、絶対変えられない。どんなことがあろうとも変えられない」。

おとしと餡子

帰りぎわ、食べてみないと分からないこともあるからさ、と賢一郎さんから紙袋を渡された。なかには酒まんじゅうが二つと、八端最中が四つ入っていた。その日の夜、さつそく酒まんじゅうを温め直してひと口食べる。ふわりと広がるお酒の香り、たつぷり詰まった熱々の餡子。うん、やっぱりおいしいな。賢一郎さんのお話を思い返しつつ、小豆の味を確かめるように、いつもよりもゆっくり食べた。食べ終わるとお腹の底がほんのりあつたかい。

賢一郎さんがおとしをいちばんに思う心は、手作りの餡子を大切にしたいという心と通じ合う。時間がかかっても、量産できなくとも、ここだけの味だと胸を張れるものを作っていこう。そんなすがやさんの和菓子作りの在りかたが、おとしが使われ続けていることに表れていると思うのだ。すがや製菓店さんの秘密に気づくことができたような、そんなこそばゆいうれしさが、餡子の味とともに胸に広がった。



上：3回の皮剥きを経て、すっかり皮が取り除かれた小豆
左：おとしの繋ぎ目は樹皮。最後に網目を張り替えたのは平成22年。直径約36cm、高さ約12cm、深さ約10cm

新町から出て行ったもの

— 銅屋鈴木家の看板 —

かつて新町通りに掲げられていた薬屋の看板。いつしか役目を終えて行きついた先は東京の骨董市だった。

明治43年の新町。写真右端に郵便局のマークが見える『奥隆行写真コレクション』通し番号0738

大

学1年生のとき、編集部の先輩からある写真のコピーを受け取った。印刷

されていたのは雑誌『東京人』165号（都市出版、2001年4月）に掲載された写真。

きりつと鼻筋のおつた外国人女性が、身の丈よりも大きな看板を大切そうに抱え、道のわきに並んだ品々に視線を落としながら颯爽と歩いていく。そんな一瞬を切り取った写真に、私の目は釘づけとなる。看板の右下には店の所在地を示す「甲州郡内上谷村新町」の文字。ひとたび目にするなり、すぐにそれが都留市内にあった商家のものだと分かった。

漆黒の下地に、美しく照り輝く金色の文字。右上に「妙薬」と銘打っていることから、おそらく薬屋のものだと予想できる。写真の説明書きには、東京の東郷神社で開かれる「東郷の杜 能美の市」で撮影された、とあるだけで詳しくは書かれていない。もともとあった場所はどこだろう、どうして骨董市に流れ出たのか。そのころ新町（都留市商家資料館のあたり）の街並みについて調べていた私は気になった。写真のコピーをくれた先輩が「郵便局

をしていた鈴木さんの家の看板」とメモを添えている。郷土史に明るいかたから教えていただいたそうだ。

商家資料館（旧仁科家住宅）が建てられる以前、その敷地には薬種商として知られた伊勢屋鈴木家が運営する郵便局があった（明治25年から大正4年まで）。新町、薬屋、郵便局、そして鈴木姓。この四つが繋がって、私は看板が伊勢屋のものだろうと考えた。しかし、のちにそれは間違いで、看板左下に彫りこまれた「鈴木與二右衛門」の家はまた別にあることが分かる。ぎっかけは屋号の違いだった。

地域のかたと会話していたとき、昔の薬屋が話題になったことがあった。そのなかで鈴木與二右衛門の家が「銅屋」という屋号であると耳にする。あとで大正5年発行の地図を確認してみると、仁科邸の向かいには伊勢屋が、その数軒となりには銅屋の名が記されている。さらに調べていくと、一番初めに郵便業務を担っていたのはこの銅屋鈴木家だったことも分かった（都留の今昔編集委員会『都留の今昔』1978年）。伊勢屋はそのあとを受け継ぐかたちで郵便局を運営していたのだ。

桑山 小児五疳驚風の妙薬
五疳萬病圓

家調合所

甲州郡内上谷村新町
鈴木與二 右衛門

看板の再現 (略図)

写真では女性が腕で覆い隠している「圓」と「家」のあいだが読み取れない。「桑山」は江戸時代から子どもの万病に効くとされた小粒の丸薬で、「五疳」こかん「驚風」きょうふうはいずれも子どもが患う病気の名前



【上】 繰り出し式の位牌を開ける鈴木さん夫妻。屋根を外して位牌を取り出す



【下】 一枚の白木には複数の人の戒名が記されている。何代にも渡って同じ名前が継がれてきたことが分かった

銅屋鈴木家が今も新町にあると知った私は、今年の7月2日、かつて看板があつた家を訪ねてみることにした。写真に出会ってからもう2年以上が経過していた。

突然の訪問を快く迎え入れてくださったのは、現在の当主 鈴木威さん(たけし)(71)と奥さん。写真を見せ、看板の由来について尋ねたところ、「じつはよく分からないんです」と答えが返ってきた。知人から雑誌に載っていると教えてもらい、そこで初めて看板の存在を知ったという。だから、いつどのような経緯で新町から出て行ったかは分からないそうだ。

銅屋では、鈴木さんの祖父まで代々「與二右衛門」を襲名している(ただし表記には「二」が「次」などの違いがある)。したがって銅屋がこの看板を掲げていたことは間違いないが、薬種商をしていた証となる資料さえ今のところ見つからないのだという。

「あのときはびっくりしましたね。奥さんが初めて写真を見たときの感想を語ってくれました。由来はまったく不明だけれど、確実に自分の家に関わりあるものが東京の骨董市

に流れ出て、そのようすが偶然にも撮影された。ものが辿りうる道のりは何通りもあつて、ときには時間や距離を隔てた意外な場所に行きつくこともある。「不思議だよねえ」とおっしゃる奥さんの言葉に共感しながら、看板が新町を出て行った事実をどう捉えればいいのか、自分なりに整理しておきたくなった。

時期は定かでないそうだが、銅屋は明治に入ってから金融業に進出し、少なくとも薬種商は廃業している。いつからか看板が本来の役目を終えていたことは確かで、もしかしたら棄てられていた可能性もあったかもしれない。地域の史料が外へ流失してしまったことは正直とても残念で、失われたものを惜しむ気持ちもある。けれど、処分されてしまうよりは誰かに価値を見出され、大事にされているほうがずっと良い。

雑誌に掲載された写真は、たんに史料が運び去られる寂しげな一面だけを切り取っているわけではない。かつて新町で使われていた看板がふたたび役目を与えられ、新しく出発しようとする姿を記録していた。

ほたるに集まるものたち

小形山の山奥でうどん屋を営んでいる「ほたるうどん」。名前は1年生のころから聞いたことがあった。そこに行つて出会ったのは、たくさんの写真。どうしてこんなに集まったのだろうか。

別符沙都樹（国文学科2年） 文・写真



写真右の「ほたる」の周りを舞うゲンジボタルたち。きれいな清流のなかでカワニナを食べて大きくなる（2013.6.29 撮影：砂田真宏）

山のなかのお店

6月15日、昼過ぎに「ほたるうどん」がある小形山へ向かう。進めば進むほど山の奥に入っていく、本当にこの道であっているのだろうかかと不安になる。民家が立ち並ぶ十字路を何度か曲がると、「ほたるうどん」の小さな看板がいくつも道に掛かっているのに気づいた。どうやらこの道で合っているらしい。民家を抜けてしばらく進むと、高川沿いの少し開けたところに、小さなお店がある。ここが「ほたるうどん」のようだ。

入り口には手作りの木の看板が立っていて、「手打ちうどん ほたる」と書かれている。何人もの人に「ほたるうどん」と聞いていたが、それは愛称で、どうやら正しくは「ほたる」という店名らしい。お店のそとに下駄箱があり、靴を脱いでから入る。店内に入ると、向かいの壁に飾ってあるたくさんの写真が真つ先に目に飛び込んできた。すごい数だなあと、思いながら座敷に上がる。右手側が厨房で、長机が4つ並んでいる。ちょうどお店の忙し



さが一段落ついた時間帯のようで、お客さんは私たちだけだ。まだ営業時間内ではあったけれど、お店を経営されている^{すきもしんいちろう}相本伸一郎さん(61)と奥さんにお話を聞かせてもらう。ひとつ聞きたびに、どちらかが答えてはもう一人がいやいや違うと遮る。お互いに言い合いながらわいわいと話す姿が微笑ましい。

お店は、ご夫婦と息子さんたちで営んでいる。店内の座敷は、以前ご夫婦でやっていた水晶研磨の仕事の休憩所だった。その仕事をやめて開いたのがこのうどん屋なのだそうです。今年で営業11年目を迎える。もともと相本さんたちが使っていた空間だからなのか、お店というよりは親戚の家に来たかのような印象を受けた。使っていた匂いが染み付いていて、お店だからと緊張らずにいる雰囲気、心地良い。

山のなかでそつと営んでいて、隠れ家のようなところですねと言うと、そうでもないのよと奥さんが可笑しそうに笑う。ばらばらと少人数のお客さんが代わるがわる来るのかと思いきや、たくさんの人たちが固まった時間帯にどつと来るのだそう。というのも、お客



上：ゲンジボタルのサナギの写真
左：写真以外に、布はり絵なども飾っている

さん同士で気遣って時間をずらそうとするものの、結局みんな同じことを考えるからなのか、来る時間が重なってしまうのだという。昼前が混むこともあれば、昼過ぎが混むこともある。これは何度も「ほたる」に足を運んでいる地元の常連の人が多いから起きることだろう。

なぜ「ほたる」なのか

うどんを食べながら、どうして「ほたる」という店名にしたのかを伺った。この周りでホタルが舞うから、ホタルがいる場所だつていとお店の場所が分かりやすいだろうからという答えがお二人から返ってきた。

ホタルが舞うこの夏場の時季だけ「ほたる」は夜にも営業する。ホタルを守るために、直接川に流すわけではないが揚げものを作るのは控え、食器を洗うときは洗剤を極力薄めて使う配慮をしているそう。強い明かりがそとに漏れてホタルに影響しないように、窓に厚手のカーテンをしてそとと営業している。後日、ホタルを見に行つたさいにそこから見

た店内のカーテン越しの光は、真つ暗闇のなかで優しく光つて見えた。主張するわけでもなく、山奥で静かに営んでいる「ほたる」。まさにホタルらしいお店のたたずまいだ。ホタルが見られるからという理由で名前を付けたにしても、つくづくぴったりの店名だなあと思う。

壁一面の写真

話は自然と入ったときからずっと気になっていた、壁一面に飾られている写真のことになつた。ゲンジボタルやリスの写真「ほたる」の店先に咲くサンショウバラ。これらはみんな知り合いの人にもらつたものだという。ぜひ飾って欲しいと置いていつたのだそう。「ありがたいことに、みんなそういうふうだね、好意で。そのまんまになっていきますけれど、増えることはなくて、みんなもう目一杯なので」と奥さん。たしかにところ狭しと並んでいて、これ以上は飾るのが難しそうだ。

数々の写真の下側には、作者や撮影者の名前が一枚一枚手書きで貼つてある。なかで

も、七色に輝くホタルのサナギの写真がひときわ目を引く。滅多に撮れないもので、知り合いの人がわざわざ専門家に頼んで撮影してもらった。それをいただいたのだそう。そんなもので飾ってあるのかとしげしげと眺める。二本足で立ち上がっているリスの写真には、『私って可愛いでしょ!!』という題名が付いている。奥さんと顔を見合わせ、思わず一緒に笑う。写真を撮った人が、ぜひこの題名にして欲しいと言って付けたものだとい



「手打ちうどん ほたる」の外観。周りには街灯などもなく、夜になると闇のなかでお店が浮かび上がる

う。ほかの作品についても一つひとつお二人がていねいに、その時を振り返りつつ、慈しむような目で説明してくださった。

波長と集まるもの

人から聞いた話なんだけどねと前置きして、奥さんがお話してくださいました。

「ホタルは、オスが自分と波長が合うメスを探して飛び交うんだって。で、止まっているのがメスで。それで、自分と波長が合わないを通り過ぎていくけれど、どんどん探して飛ぶので、それで舞ってるんだって、オスが。メスはじーっとして光を放ちながら（待っている）」



橋の上から見た高川。伸一郎さんいわく、ホタルは音に反応するそう。手を叩くと4、5匹が一斉に発光した

「人間も変な話そうだよ」と続けるのを聞いて、なるほどなと思う。ホタルは波長が合う相手を探す。人も自分の心地が良いところに自然と集まる。お客さんが固まった時間に来るといいうのも、一つの時季にだけ舞うホタルのようだ。「ほたる」というお店に魅かれ、吸い寄せられるようにしてここに集まった。そんな人たちがいることを表すのがこの絵や写真なのだろう。

私も「ほたる」に魅かれたひとりだ。なぜ魅かれたのかというと、理由は一つではないような気がする。お店や営む人たちの雰囲気、暗闇に優しく浮かび上がる姿が、私を魅きつけた。「ほたる」という存在自体に魅きつけられたとも言えるかもしれない。だとすると、これだけたくさんさんの写真が並ぶなんて、もしも「ほたる」が本物のホタルだったとしたらさぞや人気なんだろうなあと考える。だからこそ、これだけの数の額縁が店内に並ぶことに心の底から納得するのだ。

「手打ちうどん ほたる」

定休日 不定休

営業時間 午前11時～午後3時

ホタルの舞う時期には予約が入れば夜も営業する。



聞きだしたはなしを
自分なりに理解し、考え
想像することで補う。
そうすることで私たち自身が
新しいものがたりを紡ぎ出していた。

ものがたりを紡ぎ始めたとき
その瞬間、ものが数多の“もの”の一つから
たった一つの大切な“もの”に変わる。



フィールド 暦

6月から7月に都留のまちで見つけたの生きもののようすをお伝えします。今回はそれ以外にも餌台にきた虫の観察もおこないました。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真



【上】クロアゲハの成虫

2013年7月14日 都留市上谷

【下】クロアゲハの幼虫

2013年7月8日 都留市上谷

クロアゲハが飛んでいるところはよく見かけますが、幼虫はなかなか見かけません



リョウブの花

2013年7月15日 都留市大幡
7月から9月に白い花をたくさんつけます



ヒメコウゾの実

2013年7月15日 都留市上谷
赤い実はジャムやジュースにもできるそうです



ノリウツギの花

2013年7月15日 都留市大幡
個体数が多く、山野でよく見かけます



カワラナデシコの花

2013年7月18日 都留市川棚
秋の七草のひとつとしても知られています



バイカモの花

2013年6月24日 柄杓流川
浅くて綺麗な流水中に生えます。川で探してみてもはどうでしょう



ネジバナの花

2013年6月29日 都留市上谷
シロツメクサに紛れて、本学ではよく見かけます

どんな虫が来るかな？

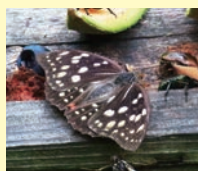
7月12日から本学のコミュニケーションホール横の植え込みにある餌台に果物の皮を置きました。写真のほかにもアリやハチなどがたくさん来ています。みなさんもどんな虫が来るのか試してみてもはいかがでしょう。



はじめにメロンの皮を置きました。どんな虫が来るのか楽しみです (2013.7.12)



カナブン毎日来ています。この日は7匹でした (2013.7.14)



【左】オオムラサキ♀ (2013.8.3)
【右】オオムラサキ♂ (2013.7.15)



餌台の果物の皮に引き寄せられた姿をたびたび見かけました

センサーカメラが写した動物たち

都留文科大学フィールド・ミュージアムでは、都留市内にセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。ここでは、2013年4～5月に都留市上谷（大学の裏山）で撮影された動物を紹介します。



キツネ 2013年4月25日 都留市上谷
キツネは頻繁に撮影される動物ではありませんが、大学の裏山ではたまに写ります。



アナグマ 2013年4月27日 都留市上谷
現在、4地点にカメラを設置して調査をしています。このうち、アナグマは3地点で確認されています。



フクロウ 2013年5月9日 都留市上谷
鳴き声は聞かれるものの、フクロウが写るのは初めてのことです。



シカ 2013年5月11日 都留市上谷
この個体は角が伸び始めています。これまでにシカは4地点中、2地点で記録されています。



ノウサギ 2013年5月13日 都留市上谷
ノウサギはフンや足跡などの痕跡はよく目にするものの、姿を見るのは難しい動物です。



カモシカ 2013年5月22日 都留市上谷
大学の周辺で初めてカモシカが確認されました。センサーカメラを使った調査における成果のひとつです。



つるりん ● 夏

季節は夏。
夏は昆虫採集だ、つるりんに出かけてみたものの昆虫が見つからない。一体どこにいるのだろうか。うっそうと茂る夏のつるりんできものの姿を探した。

砂田真宏（初等教育学科4年） 文・写真

うっそうと茂るつるりん。ただ歩くだけでは生きものの姿は見つからない

梅

雨に入り雨の合間をぬってつるりんに通う。林内を歩

く。少し歩いただけなのに下草にいた雨水で靴はびしょ濡れだ。林床にはジャノヒゲが花を咲かせている。春から初夏にかけて咲いていた花たちも一通り咲き終わって、林は深い緑に包まれていた。そうするといつそう林のなかは薄暗くなる。林のなかでも比較的高いところに実をつけているオニグルミ。時折吹く強い風でいくつかのまだ青い実が落ちてくるとその存在に気づく。そしてもう一つ林内でよく目にするのは動物たちの死体に群れるシデムシたちだ。ミミズの死体に4、5匹が群がっている。こんなふうに見たもの、気づいたことを少しずつノートに記していく。

樹洞と倒木

整然と刈り込まれたキャンパス内のほかの樹木と比べて、林のなかは雑然とした印象を受ける。落ちてし

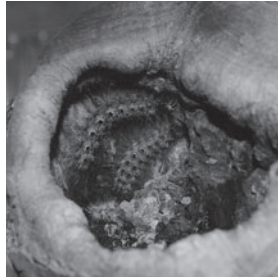
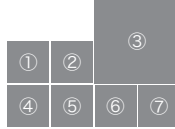
まった枝、倒れた樹木もそのまま

だ。倒木を避けながら樹木を見てまわると幹や枝にぼつかりと穴が開いたものがある。見つけたなかで一番大きなものは握り拳ひとつ分の大きさだ。これは「洞」とか「樹洞」とか呼ばれる。樹洞ができる仕組みはこうだ。樹木の枝が折れたり、樹皮に傷がついたりするとそこから木材腐朽菌というキノコのなかまの菌類が入り込む（木材腐朽菌の代表的なものはサルノコシカケなど）。それが樹木を腐らせる。しかし、樹木は樹皮を作ってそこには穴が開く。

樹洞は大きなものになると人が入ることのできるほどのものもある。大きさに合わせて樹洞はムササビのすみかになったり、鳥が巣を作ったり。大きなものはクマが冬眠に使うこともある。つるりんの樹洞はまだ握り拳ひとつ分の小さなものだから哺乳類や鳥の巣には適さない。樹洞のなかには小さな生きものたちが隠れている。そのことは幼いころから

つるりんの生きものたち

①ヘクソカズラの花 ②マイマイガの幼虫 ③ルリボシカミキリ ④ミミズ ⑤アケビの実 ⑥キマワリ ⑦オニドコロの花 (①～⑥は2013年7月14日、⑦は2013年7月9日撮影)



経験的に知っていた。小学生のころ、大きなスズカケノキの樹洞に隠れているカミキリムシを捕まえて遊んでいた。そんなことを思い出しながら樹洞のなかを覗く。オオモミジにできた樹洞には親指ほどの太さのある大きなマイマイガの幼虫が3匹隠れていた。(写真②) 樹洞の底にはたくさんさんのフンが溜まっていて、どうやら樹洞の空間を利用しているのは間違いないさそうだ。

新しい発見

見つけた生きものの数はそれからしばらく増えなくなった。夏は春よりもたくさんさんの生きものとの出会いを期待していたのに。先に挙げたマイマイガの幼虫、シデムシ以外に新しい出会いがない。もう一ヶ月近くこんな調子だった。

今まで一人でつるりんに行くことが多かったが、7月に入って何度か他の人と行くことがあった。お互いに見つけたものを話しながら歩くと

いつもより多くの生きものを見つけることができた。単純に2人に増えたから2倍になったのではない。実感では3倍にも4倍にもなった。人によって見ているもの、気になることが違っていてもいい。つるりんですつと見てみたいと思っていたルリボシカミキリ(写真③)も一緒にいた友人が見つけたものだ。立ち枯れの木の幹にいた。

公園や街路樹では撤去されてしまう倒木や樹洞。人が必要としないものが生きものにとつてどういうものか考える。多様な生きものを支える存在としてみると雑然とした倒木や枝葉の一つひとつが林のなかできちんと意味をもっていた。

場所を変える。ほかの人と行ってみる。そんな簡単なことで夏のつるりんの楽しみはぐつと広がった。私たちが黒板へ向かう教室と壁を隔てただけの場所。そこで生きもののからしを垣間見ることが今は何よりもおもしろい。

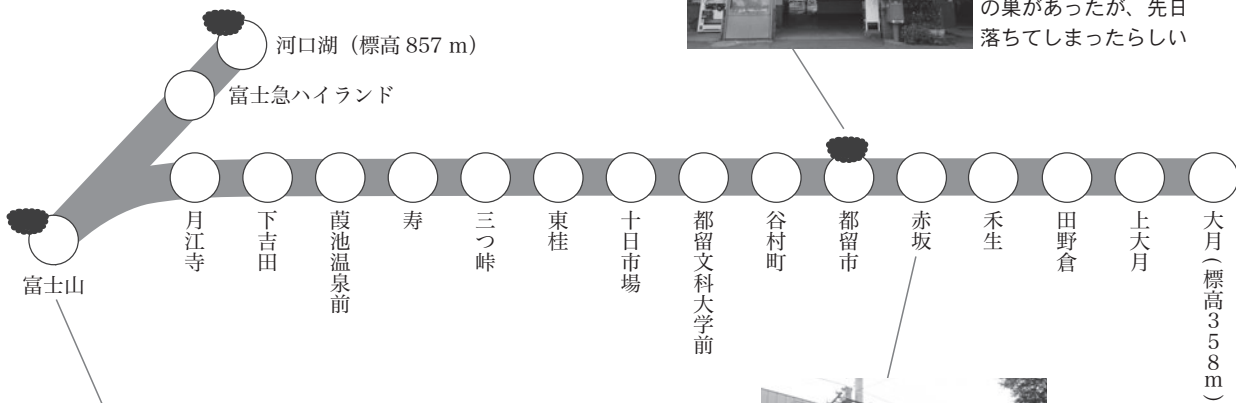
駅舎のツバメの巣



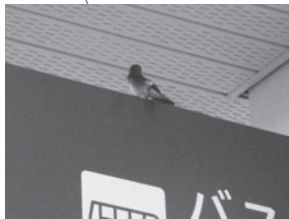
ツバメは人通りの多い場所に巣を作ります。駅舎にもツバメの巣はあるのでしょうか。いくつかの駅で調べてみました。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

……ツバメの巣があった駅



都留市駅の駅舎。駅員によると、今年ツバメの巣があったが、先日落ちてしまったらしい



昨年、富士山駅のホームでツバメの巣を見つける。ツバメは巣の周りを飛び回っていた



赤坂駅の駅舎。無人駅だが、利用者が多い

関 西や関東では、鉄道の駅でツバメの巣の有無を調べている人たちがいます。関東ではいま、twitterやFacebookなどを利用して、市民参加調査の「鉄道駅のツバメの巣ウォッチング」が展開されています。私はツバメ類が好きなので、西多摩地区の駅の営巣情報を提供させていただきました。このとき、同じようなことを富士急行線でもできないだろうと思ったわけです。

ツバメは人家などにも営巣し、あまり人を恐れませんが、身近な生きものの観察の対象として、とても優れています。富士急行線は大月市から富士河口湖町までに18駅、延長約26kmで標高差は約500m。無人駅もあり、どのような条件の場所をツバメが好むのかを明らかにできそうです。

2013年の6〜7月、試しにいくつかの駅でツバメの営巣状況を調べてみました。都留市駅と富士山駅、河口湖駅にはツバメの巣がありました。一般的にツバメは、人通りの多い場所に巣を作りますが、利用者の多い大月駅や赤坂駅では見つかりませんでした。赤坂駅は無人駅なので、ツバメが巣を作っていないのかもしれませんが。

日々、時間に追われる社会人や学生のみならず、駅で電車を待つあいだにツバメの巣を観察するのはいかがでしょうか？

(西教生)

野外へ誘う一冊

本を読んで野外へ出よう。
新たな気づきが待っている。

ワタリガラスの謎



バーンド・ハインリッチ 著
渡辺政隆訳
どうぶつ社 1995 年

ワタリガラスは北アメリカでは珍しい鳥ではない。しかし警戒心が強く、観察しようと立ち止まった人間の姿を速くに認めただけで飛び去ってしまう。

謎がまた新たな謎を呼ぶあたりワタリガラス研究の過程はまさに推理小説に似ている。そして困難をどのような工夫で乗り越えていくのかが具体的に描かれていて、動物観察をするさいの参考にもなる。いつかこんな自然誌を書いてみたいと思わせる一冊である。

生物の謎解きは推理小説とちがう点がある、と著者のハインリッチは言う。多くの発見をすればするほど、わかっていないことがたくさんあることをますます自覚するようになるからだ、と。本書は、科学が進歩したといわれる現代でいかに身近な自然の世界が不思議と謎に満ちているかを改めて教えてくれる本でもある。（北垣憲仁）

子どものころに夢中になって追いかけていた昆虫。また、追いかけたくなるきっかけをくれた一冊です。外国の昆虫を思わせるような鮮やかな写真はバラバラと眺めているだけでも楽しませてくれます。

昆虫の顔、サナギ、クワガタのハサミ、虫こぶ……、著者の関心は昆虫そのものだけではなくに留まりません。時には昆虫のちいさな落とし物も一つひとつついでに集めています。たとえば「ほぼ一生集め」と題してナナフシモドキが一生で食べた葉の食痕はぜんぶで81枚、そしてその間にしたフンは5094粒。ページいっぱいに敷き詰められたフンの写真は圧巻です。私たちからすると小さなちいさな世界ですが、その小さな世界で起こっていることのスケールの大きさに気づかされました。

（砂田真宏）

森の休日5 集めて楽しむ 昆虫コレクション



安田守 著
山と溪谷社 2007 年

Outdoor 21 Books ⑫ 教えてゲッチョ先生！ 雑木林は不思議な世界



盛口満 著
山と溪谷社 2003 年

ゲッチョ先生こと盛口満さんが、埼玉県飯能市 私立自由の森学園で教師を務めていたころのお話。学園の敷地内にある雑木林を舞台に、ゲッチョ先生と生徒たちは小さな発見を積み重ねていく。ドングリを食べてみたり、背中にハートマークをつけたカメムシを見つけた。何も無いように見える雑木林が、じつはさまざまな生きものや植物との出会いに満ちあふれている場であることに気づかせてくれる。ゲッチョ先生の手描きの、登場する植物や昆虫のスケッチが添えられているのも魅力のひとつ。

本書を読み終われば、これはなんだろう？ どうしてこうなるのだろうか？ と楽しみながら考えを巡らせるゲッチョ先生に影響されて、身近な自然にもっと目が向くようになっているかもしれない。

（深澤加奈）



富士山に近づくにつれ標高が高くなる。法泉寺前から田原の滝に向かう旧道は、緩やかな坂道がつづく

法泉寺門前にある萬霊等（塔）。正面には「萬霊等」と刻まれ、右側面には「萬」「霊」「等」の字が、それぞれ一部だけ彫られている。彫り途中でやめたのか、それとも別の意味があるのか。いまだに分かっていない謎だそう



田原の滝（左）とその滝口（上）。昔は滝よりも上流に橋があったが、下へ下へと架け替えられ、現在の佐伯橋にいたる

富士道_{みち}を歩く

2013

谷村から十日市場

夏狩から東桂

一本の道をじっくり歩きながら、土地の歴史や民俗を探求する。それが、「富士道を歩く会」だ。昨年5月に大月市を出発し、目指すは富士吉田市の「北口本宮富士浅間神社」。毎回3時間ほどを目安に、案内役の都留市郷土研究会の皆さんと古道を辿っていく。

第9回（4月29日）は谷村の法泉寺から滝下浄水場を経て田原神社および田原の滝の上流部へ。第10回（5月25日）は佐伯橋から十日市場の街なかを抜け、小篠神社から永寿院へ。第11回（6月22日）は十日市場から夏狩を経て、東桂にある宝鏡寺までを歩いた。ときに大きく寄り道しながら、ゆつくりと進んだ三回分の旅の記録。

【屋根のかたちと装飾】

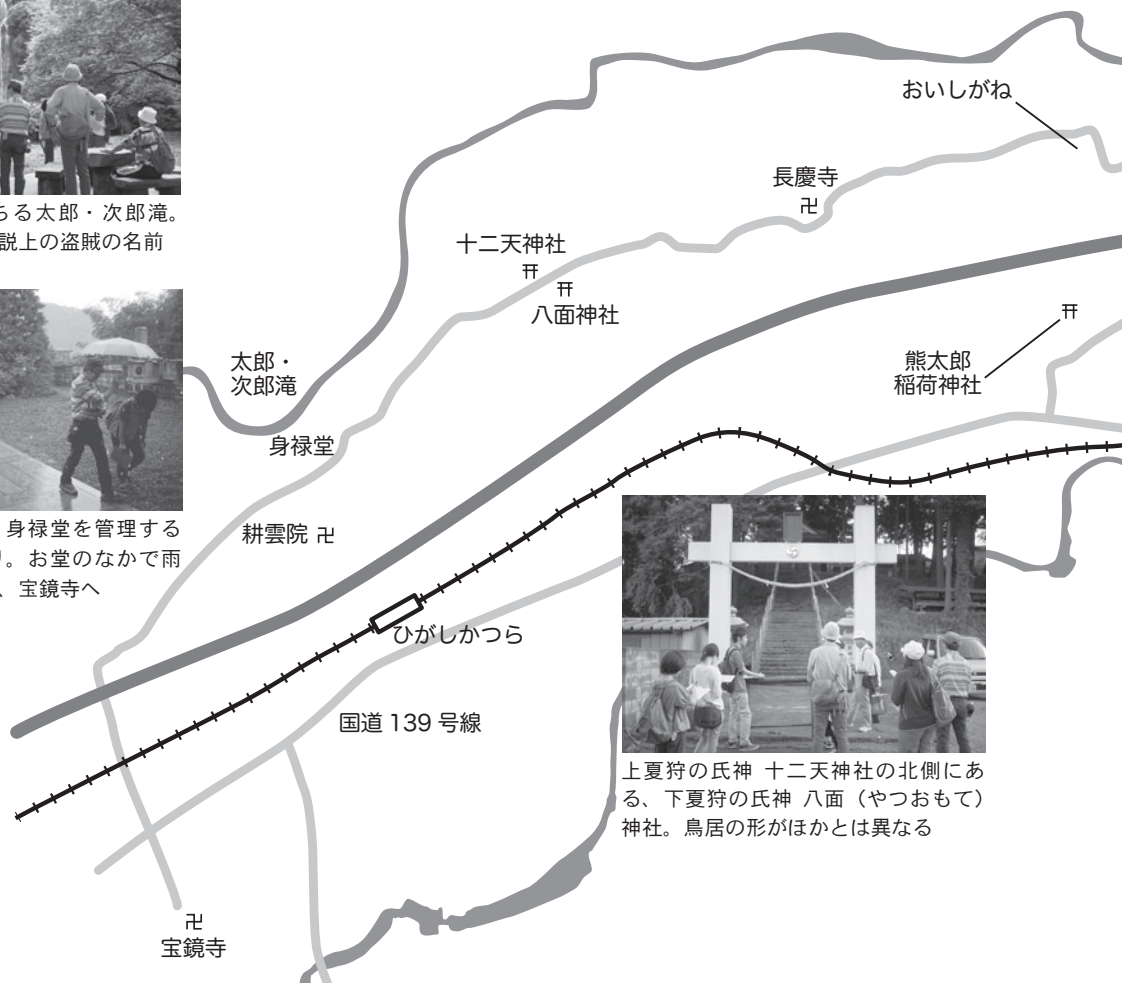
富士道を歩くなかで、さまざまな寺社や民家に出会った。屋根のかたちは、その建物を知るうえで重要な注目ポイントだ。切妻、入母屋、寄棟……。郷土研究会の方々にさまざまな種類を教えていただいている。なかでも興味深いのが、民家の屋根のデザイン。かつて、格式あるとされた家には左写真のような装飾が取り付けられてきたという。上野原から西桂にかけて見られたが、最近では少なくなったそう。街で民家を見かけたら、屋根全体だけでなく軒下の装飾にも注目したくなる。



柄杓流川に落ちる太郎・次郎滝。
太郎と次郎は伝説上の盗賊の名前



通り雨に遭い、身禄堂を管理する
耕雲院で雨宿り。お堂のなかで雨
がやむのを待ち、宝鏡寺へ



上夏狩の氏神 十二天神社の北側にある、下夏狩の氏神 八面（やつおもて）神社。鳥居の形がほかとは異なる



民話の舞台、巨岩「おいしがね」。その昔富士山から飛んできたと伝わるが、じつは溶岩石ではないらしい。「おいし」と「おかね」という二人の姉妹にまつわる伝説があることから、本当は「おいしかね」だという人もいる

起すよる朝



—生徒と本気で向き合う—

中

学校は中学校で、行ってみたらすごく魅力があるの。小学校の子もつていうのは、教師と子どもの関係でしょ。だから理解し合うといっても、限度があるよね。人間としての付き合いっていうのは、やっぱり小学校は大人と子どもでしょ。でも中学校は人生問題でもなんでも、みんなぶつけ合えるでしょ。だから話がきちんとできるのね、中学校は。

家庭科は実践

私が（富士吉田市の中学校に）行つたとき、家庭科の部屋の戸棚に縫いきつてないパジャマが、くしゃくしゃいっぱい入つてたの。全部途中の作品だったの。3年生が縫いきらな

いで卒業してしまつたの。

それで私は子どもたちにグラフを作らせたの。たとえばパジャマの過程。一番先に何をするか、その手順ね。それを今日ここまでいつたら塗つていこう。そして塗れば終わるって。

そのとき生徒に言つたの。家庭科っていうのは実践だよって。ペーパーに書いただけでは役に立たないよ、すべて家庭科は実践だから私は、100点とつてもそれが評価じゃない、授業中にやることが私の大部分の評価だからそれだけ承知してねって。そして、できあがらない人は、放課後に私がいるから家庭科室へきて。教えてあげるから。

そしたらね、卒業するまでにパジャマが全部仕上がって、（山梨）県の実験科の展示会

都留市にお住まいの遠藤静江さん（80）の経験や生きかたに惹かれた私たちは、遠藤さんの人生観について聞き取りをおこなっています。今回は、25年前に非常勤講師として中学校に勤めていたころのお話を軸に、遠藤さんが考える教員としての姿勢を紹介します。

で入選した子もいるのよ。

それで校長先生が卒業式の時「今年の3年生はパジャマを全員縫いきました」ってそう言ってくれたの。やつぱし、そういう取り組みを通して、子どもに対してきちんとはじめある教育をするって大切。

70分の損

でね、その家庭科の時間のなかで、7人くらいが10分以上遅れてきた。で、聞いたの。あんたうち何してたのって言つたらね。「何ちゃんが具合悪くて保健室行つたから、ついてった」って言つたの。だから、その人介護しなければ歩けなかつた？ って。「ううん、そんなことないよ」 ちゅうの。



中学校に勤務していたころの遠藤さん（当時 57 歳）

あのね、私は小学校でもこういうことを教えてきた。自分で歩ける人は保健室に行つて、自分でどこが痛いとかきちんと言えるようにしよう。頭が痛い、お腹が痛いって保健の先生に、自分の口から言えるようにしようって。そういう教えかたしてきたよ。だから、こんな 1 人が具合が悪いとき、7 人も行つて、10 分と思うけれど 70 分損してる。1 人分じゃないんだよ。こんなもつたないことないでしょって言つたら、やつぱり行つた子つちが「遠藤先生は小学校の先生だから知らないんだよ。中学校つてみんなそうしてるんだよ」つちゅうから、ああそう、じゃあね、校長先生と学年主任の先生に私が申し入れます。改革しましょう。そういう悪い風習はやめるように、校長先生にまず交渉します私が。そうしたら、わいわい騒いでさ。困っちゃつて、

そして大騒ぎつてわけ。

生徒指導の先生にそのこと言つたの。そして、「みんな教室に集まれ。遠藤先生とみんなの言い分をここで言え」つて言うの。そしてそこでお互いに言つた。

そしたらさ、どう考えても勝ち目がないじゃん。生徒が。で、勝ち目がないとこへ持つてきて、その生徒指導の先生が「おまえたちは入学してきたときは、すごい良い顔してたのに、見る。だんだんそういうふうになつてから、みんなブスになつちやつた」と言つたの。女の子つてブスつて言われるとすごく嫌で、みんなめそめそ泣き出したりね、わいわい言いだしたの。

わかんるところまで向き合う

まあ一応、「おまえたちが悪いんだから、きちんと授業を受けよう」つていうことになつたの。そしたら（生徒たちが）教室から出ながらさ、「遠藤先生つてすごい本気で怒るね。私たちそんなに本気で怒ると思わなかつた」つて言うの。だから中学の先生が本気で怒らないのよ。

ほかに、家庭科の時間、「先生、（自分の）家へ行つていいですか、近いから」つて言うの。どうしたのつて聞いたたら、「靴下に穴があいた」つて言うの。え？ 靴下に穴があいてそつから何か起こるのつて。

受け持ちの先生（若い男の先生）が「遠藤先生がいいつて言つたら行つていい」つて言つたの。何言つてんのつて。靴下に穴があいて、家へ履きに行く？ つて。なんでつて（聞いたら）、「（靴下に穴があいて）みつともないから」。先生いっぱい靴下余分に持つてるから、それ貸してやるから。

若い男の先生に言つたの。先生、靴下に穴があいたから履きに行かせるなんてどういうことなのと言うと、男の若い先生も女の子が恥ずかしいなんて言やあさ、途端に困っちゃつて、いいよなんて言つちやうのよね。

だからほんとに本気で向き合つたらわかるんだけど、わかるところまで向き合わないで、中途半端ね。ただ締めるんじゃないで、優しときは優しく、きちんとしなきゃなんないときは、きちんとつてことは、中学生になればわかるの。それをいい加減にしといちゃいけない。ちゃんとわかるのよ。

愛しているから伝える

まあ、そんな経験があつて、山のなかの中学校へ行ったとき、授業中わいわいするの。それがおもしろいのよ。

家庭科の時間に私が教室に入るなり「先生、今朝何食べてきた」「先生、昨日お休みで何してたの」って聞く子がいるの。Kちゃんちゅう子でね。Kちゃんは先生とお話したいらしいけども、Kちゃんばつかが相手じゃないんだよ。ここ37人いるんだからね、先生37人相手しなきゃいけないから、おまえの言うことだけに答えられないよってそう言うの。

すると、またほかの子が何か言うの。Sくんっていう子が、べちゃくちやしゃべってるの。だから私が幾度もSくん！ こっち向いてSくん！ ってこう言うの。「なんでおればつか言うんだよ。ほかにだってしゃべってるのがいるじゃんか」って。いや、おまえを愛してるから、私が言ってるんだよって言ったの。そしたらどーっとみんな笑ったのね。

授業が終わったら女の子がついてきてね「先生、私たちは愛してない？」って聞くから、

そんなことない。みんな愛してるよ。みんな愛してるけどね、Sくんはああいうことしてるから、愛してるからちゃんとしてほしいと思つて言ってるんだよって言ったの。そこで、そのことは私ももう忘れてたよ。

そしたら職員室で先生たちが「遠藤先生が授業に行くと（生徒が）窓を開けて『おい、恋人がきたぞー』って言ってるけど、あれはなんですか」って言うの。ん？ ああ、わかった。それはね、Sくんがもうべちゃくちやしゃべって、幾度も注意してなおらなくて、私が「なんでおればつか言う」って（Sくんが）言うから愛してるって言ったんだよ。

中学生の気持ち

おもしろいじゃんね、うんと嫌がついてるかと思つたの。そしたらその中学校が、都留市も含めて、中学校の相撲大会で優勝したの。で、校長先生がテレホンカード作つてくれた。その（相撲大会で優勝した）子どもたちが全部メンバーが入ってる。テレホンカードを先生たちみんなに配つてくれたの。

で、見たらSくん入ってるの。そのとき私

はSくん入ってるなあと思つたよ。だけど授業に行つて、そのことは全然口にしなかった。

そしたらSくんが「先生見た？」ってこう言つたから私はね、あつ見た！ Sくん優勝したんだねって言つたら（Sくんが）「無視してもいいよ」。わかる？ その中学生の心理。「無視してもいいよ」って言うからね、いや、無視じゃない、先生言い遅れた。一番先に言えば良かったんだよねって。そういう感じだったの。だから心理的には悪い感じじゃなかったのね。私が帰るときなど男の子つちみんなバルコニーに出て、「恋人が帰るからさようなら」って言ってくれるの。

やっぱり子どもって言うのは、自分自身をうんと理解してもらいたい。だから、理解し合ったら絶対背いたりしない。で、理解するっていうのは、温かい目で見るといふこと、つまり基本的なことね。理解してやるってことが大切なのね。

生徒との会話のなかで

さつき（話をした）べちゃくちやしゃべつて私に「何食つてきた」つちゅうKちゃんに

……(略)……

卒業というなさきでは
せつない程
人間を素直にする
教えるものと教わるものが
かたちをこえて結び合う



今、わたしの手許では
巣立って行った子ども達の
未来のように
真紅のばらが
少しずつ開いていく

巣立って行った子ども達の
夢のように
ピンクのばらが
あったけの大きさに
花弁を広げた

机の引き出しの中では
子どもからの
メッセージが
わたしを励ます

「先生いつまでも青春してね」

——遠藤静江「産休補助教員 II 卒業」より

ね、Kちゃんばつか相手にしてられないんだ
よって言ったら「おれな、お母さんが死んで
からな、おばあちゃんに育てられてこういう
性格になった」って言うの。だから、あらK
ちゃん、じゃあ学校では先生がお母さん替わ
りしてやろうかって言ったら「ううん、もう
お父さん後妻ももうからいい」って言ったの。
それで私、これほんとの話かしらと思つて、
職員室へ行つて、先生がたにKくんつてさ、
お母さん死んで、おばあちゃんに育てられて
るつて本当と聞くと(先生がたが)「そうだよ」
つて。お父さん再婚するだつていうじゃない
つて言ったら先生つちが「先生それどこで聞
いた？」つて言うから、だつて授業のときそ
う言つたよつて言ったら「そういう身の上話
を子どもがする？」つて。だつてしたんだも
の。Kちゃん私にしてくれたよ。2、3分だ
けど。そういうふうに言つた。

理解し合うこと

だから、先生たちもびつくりしたらしいの。
子どもが自分の身の上を、そんなところで打
ち明けて話すつて考えられなかったのね。



遠藤静江さん
(えんどうしずえ)

昭和7年11月23日生まれ。平成元
年3月まで小学校の教員を勤める。
その後、都留市周辺の小中学校で非
常勤講師を66歳まで勤める。国語
と家庭科、図工をおもに担当する。
遠藤さんにとって教員生活とは、
「人間関係のなかで自分を育てる」
こと。写真は遠藤さんに中学生から
もらった色紙を見せてもらったと
きのもの(2013.07.24)

やっぱり先生つていうのはいつも「先生で
す」つて一段高いところにいて、「おまえた
ちは……」つちゅう感じなのよね。それが、
ある程度目線を同じにして、理解し合うつて
いうことによつてもものすごく違ってくるの。
そういうことをつくづく中学(に勤務)し
ながら教えながら、私は学んだ。
人間ていうのはやっぱり、理解し合えるの
よ。だから、いろいろな問題が起こつて
しよ。今も。だけどそういうね、理解し合う
ことが足りないんだと思う。子どもどうし
も、ふざけ半分が本物になつていじめになつ
たりするでしょ。だけど、昔だつてあつたけ
ど、理解し合えないのね、今の子どもたち
で、生活のなかで理解し合えない状態があ
ると思うのね。

FIELD・NOTE NEWS 2013.6～7

2013年6月から7月までの『フィールド・ノート』
編集部の活動のようすやできごとをお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

和服リフォームでファッションショー（6月2日）



堂々と歩く姿はまさにモデルさん

本誌で取材にご協力いただいている遠藤静江さん（38-41頁参照）の主催する「和服リフォーム展」が、都留市谷村にあるミュージアム都留で6月2日から9日に開催されました。展示された作品は129点です。2日にはそこでファッションショーもおこなわれ、65点の作品をモデルの方々が和服をリフォームした服を着て会場内を歩きました。観客席のすぐそばをモデルが歩く演出に、観客はおおいに盛り上がりました。

（金原由佳）

自然観察会を開催しました（6月9日）

都留文科大学の裏山にて、初夏の自然観察会が開催されました。当日は年配の方から下は幼稚園の年長さんまで、大勢の子どもや保護者も交え、市民26名の方にご参加をいただきました。クロモジの枝を削り楊枝を作ったり、キイチゴや桑の実を手を真っ赤にして食べたり、また学生スタッフが調査した植物についての説明もおこないました。参加者からは「子どもたちの目がキラキラしていたのはもちろん、付き添いで参加していた私もワクワクしました」との感想をいただきました。

（地域交流研究センター職員 小林幸恵）



楊枝作りは小刀を使うのでみんな真剣



アカボシゴマダラの幼虫

アカボシゴマダラを確認（7月22日）

市民のかたからの情報で、アカボシゴマダラという蝶の幼虫が都留市宝で確認されました。この蝶は、もともと奄美諸島に生息しています。しかし、すでに神奈川県や関東地方南部でも定着し、分布が拡大しています。人為的にこの蝶を放した可能性が高いと考えられています。幼虫はエノキを食べて育つため、同じエノキを食べて育つゴマダラチョウやオオムラサキへの影響も懸念されます。この蝶に関する情報がありましたら編集部にご一報ください。

（北垣憲仁）



ミニ菜園に嬉しい実り

昨年まで中屋敷フィールドの畑で育てていた野菜を今年は編集室前のプランターで育てています。中屋敷フィールドの畑では野生動物がやってきたため昨年の収穫はほとんどありませんでした。今年育てている野菜はキュウリ、トマトなどの夏野菜を中心におよそ25種類で、中屋敷で育てていたときより多くの種類を育てています。梅雨の時期を経て、少しずつ実をつけるようになりました。

(砂田真宏)



大きくなるのが楽しいスイカ (2013.7.28)

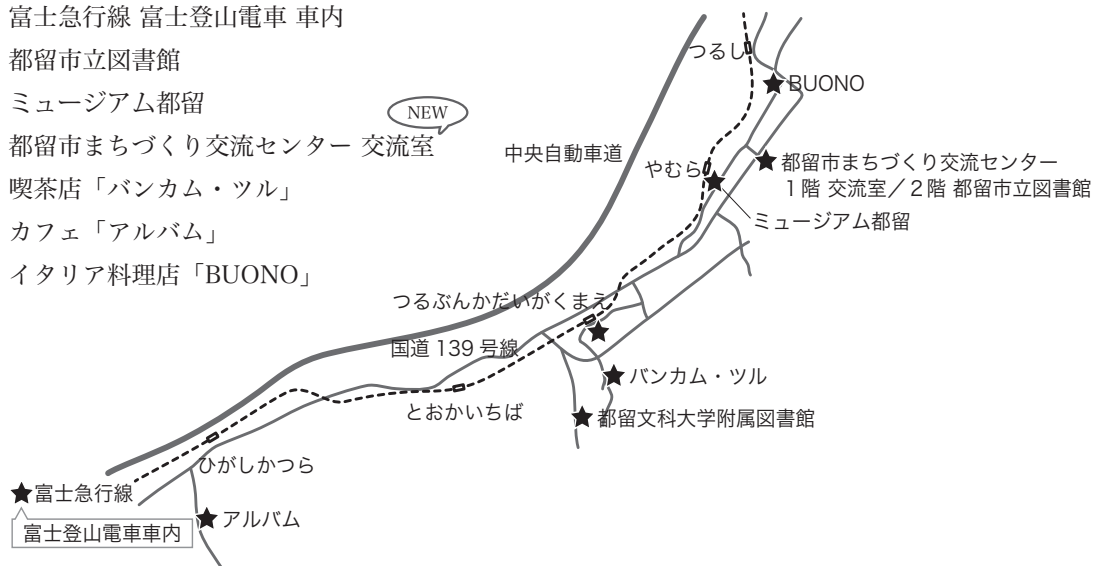
『フィールド・ノート』が読める場所が増えました

以下の場所では本誌を閲覧することができます。

バックナンバーもありますので、ぜひお立ちよりください。

【閲覧可能な場所】

- ・都留文科大学附属図書館
- ・都留文科大学前駅 駅舎
- ・富士急行線 富士登山電車 車内
- ・都留市立図書館
- ・ミュージアム都留
- ・都留市まちづくり交流センター 交流室
- ・喫茶店「バンカム・ツル」
- ・カフェ「アルバム」
- ・イタリア料理店「BUONO」





中屋敷フィールド

川棚にある中屋敷フィールドでの活動をお伝えします。

畑に今年はアイ、ベニバナ、ワタの種を蒔きました。5月上旬はベニバナが生きものに掘り返された跡が数ヶ所あったため、収穫できないのではないかと心配していました。しかし、5月12日に畑のまわりにネットを張ったことによって掘り返された跡が減っていました。畑に設置したセンサーカメラを確認したところ、畑をイノシシが掘り返しているようすは見られませんでした。いまだに通り道としては使っているようすが写っていました。



センサーカメラに写ったイノシシ(2013.6.24)



ベニバナの生長記録 中屋敷ノートより

6/1	ベニバナにアブラムシ発生
7/4	蕾をつける
7/6	2、3輪咲いているの確認
7/8	たくさん咲き始める
7/10	黄の花が開花
7/12	紅色の花へと変化し始める
7/16	花びらを摘む
7/20	
7/25	花の盛りを過ぎる



上：雑草の生い茂る畑 (2013.7.4)

下：中屋敷の全景 (2013.8.1)



黄色の花をつけるベニバナ。紅色になったら花びらを摘む。右は蕾の状態



アイとワタはあまり生長がよくありません。6月27日、7月4日、10、26日に地道に草取りをしました。ただ、根付いた雑草はなかなか減らず、栄養を摂られてしまったようです。ほかにも考えられる可能性はあります。しかし、現時点では収穫は芳しくないのは変わりありません。アイの染め物は、編集室前でもいくつかプランターを使って育てているのでそれを使って挑戦してみたいと思います。ワタは7月中旬から花が咲き始めるそうなので、収穫できることを祈って、注意深く見ていきます。

(前澤志依)





本学附属図書館横のビオトープ

大学内の小さな変化をお伝えします。

ビオトープ活動（6月25日）

ビオトープでドウダンツツジの剪定をしました。はじめて手にした剪定ばさみは想像以上に扱いにくく、庭師さんのようにとまではいきませんでした。剪定し終えた生垣を眺めたときには小さな達成感がありました。白と紫のブッドレアはそれぞれ見ごろをむかえ、オニグルミには青々とした実がつき、エゴノキの実もふくらみ始めています。もう少しでヒャクニチソウの花も開きそうです。（深澤加奈）



切り落とした葉を集めて作業完了



新しい看板の設置（7月14日）

この夏はほぼ毎日ビオトープにヒャクニチソウのようすを見るため足を運んでいます。連日の猛暑で毎日の水やりが欠かせません。そして、水やりの合間にはビオトープの生きもののようすも気にかけて見るようにしています。そのなかで気づいたことやぜひ見てほしいものを「ビオトープ瓦版2013 今週の見どころ」として1週間に1枚、ミニ掲示板で紹介しています。ビオトープにお越しのさいはぜひご覧ください。（砂田真宏）

（砂田真宏）

池のメダカのように

冬から春にかけてビオトープの池のようすはいつもと違っていました。池の水はふだんの半分もありません。群れで泳いでいたメダカたちは2、3匹しか見つけることができなくなりました。その大きな原因は池の排水部分に入った亀裂のようでした。6月中旬にはその亀裂が修理され、池には水が並々と湛えています。今は数mmほどのちいさな赤ちゃんメダカが見られるようになりました。今年も群れで泳ぐメダカを見ることができてほっとしています。（砂田真宏）



水中を泳ぐ赤ちゃんメダカ



発行人

北垣憲仁 (6-7)

統括編集者

西教生 (8-9,31,34)

編集長

牛丸景太 (22-23,36-37)

前澤志依 (1,34,38-41,48)

副編集長

深澤加奈 (4-5,18-21,35)

別符沙都樹 (24-29)

編集

鈴木陽花 (46-47)

砂田真宏 (32-33,36-37)

廣瀬はづ紀 (10-11,30)

伊藤瑠依 (10,17,44-45)

加藤萌香 (2-3,10,13)

金原由佳 (10,16,42-43)

川田陽香 (10,14)

舟田早帆 (10,15)

森本楓 (10,12)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ



大切にしているもの

夕 方のグラウンドで保育園のころ、鉄棒にぶらさがって下を見たとき、白くて真っ平ですべすべな石を見つけました。当時の私にとって、その石の発見は世紀の大発見のようなもので、家族に得意げに見せたことを覚えています。すっかり気に入って、よく触っていたら、手触りが拾ったところよりもすべすべになりました。今でもなぜか捨てられないその石に触ると、あのとき発見したうれしさを思い出して、小さいころ母になぐさめられたときのように落ち着くのです。(伊藤瑠依)

涼 を求めてアイスを買いに行ってみると、初めて見るアイスが売られていたので、物は試しにと買ってみました。もしかしたら、次にお店に来たときにはなくなってしまっているかも知れませんから。私が大切にしているものは、このような偶然の出会いです。偶然の出会いには、自分の世界を広げるチャンスになると思います。私にとってそれはとてもワクワクするものなので、これからも偶然の出会いに目を、耳を傾けて大切にしていきたいです。(川田陽香)

み どり色が好きで、洋服は緑色のものを選びがちです。なかでもお気に入りなのが、故郷で暮らす母と色違いで持っているワンピースです。濃い緑色の地に少し個性的な柄が特徴のこのワンピースは、母が選んで買ってくれました。地元には少し照れくさく思いながらも、親子でおそろいの服を着て一緒に出かけたものです。友人から「そのワンピース可愛いね」と言われると嬉しくなるのと同時に、センスの良い母を誇らしく思うのです。(舟田早帆)

FIELD-NOTE (フィールド・ノート) 78 号

発行日：2013 年 8 月 31 日

発行部数：500 部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

©2013『フィールド・ノート』編集部 乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

次回予告

FIELD・NOTE 79号 2013年12月発行予定

特集 生きものに

近づくための工夫

(仮)

この夏、都留の生きものにもっと近づく――

FIELD・NOTE

no.78

発行日 2013年8月31日 (年4回発行)
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 『フィールド・ノート』編集部

